

## 2. 全国婦人防火連合会（総会）（その2）

### 平成16年度全国婦人防火連合会総会

2月23日の第5回応急手当普及啓発推進会議において、日本放送協会解説委員山崎登氏により、講演「最近の災害取材の現場から」が行われました。スライドでの説明と共に、新潟・福井の豪雨災害や新潟県中越地震から学んだ高齢者対策や、各地の取り組みなどが紹介されました。

24日に行われた全国婦人防火連合会総会では、下河内司総務省消防庁防災課長による「最近の消防情勢について」の講演も行われ、ご参加の皆様大変好評をいただきました。

この2つの講演で使われた資料とともに「最近の災害取材の現場から」の講演次第を掲載します。

### 最近の災害取材の現場から（講演次第）

日本放送協会解説委員 山崎 登

どうもこんにちは、NHKで解説委員をしております山崎と申します。各地方の名士の皆さんの目の前で私の話を聞いていただけるということで、今日は大変有り難いと思ってやってきました。

自己紹介をかねて、普段私が何をやっているかというあたりからお話をさせていただきます。私はNHKで解説委員という仕事をしております。解説委員という仕事にはいくつかの担当がありまして、私の担当は自然災害と防災です。どうい

うことをするかというと、例えば地震が起きたり、火山が噴火した、あるいは去年は大変多く台風がきましたが大雨が降った、水害が起きた、土砂崩れが起きた、それから大きな火事も災害になりますのでそのような事があるとすぐに現場に出かけていき、どうしてこんなに大きな被害が起きてしまったんだろう、過去の災害と比べて今回の災害で何か特徴はあるんだろうか、過去の教訓はちゃんといきたのだろうか、もし伝えるべき今回の災害の教訓があるとしたらそれは一体何だろうか、というような事を消防の方や、河川の場合ですと河川の管理をしている方、自治体の方、地元の研究をしている大学の先生、地元の消防団の皆さん、そのご近所の皆さんなど、いろんな方にお話を伺って、取材をして喋るに足る何事かをテレビで伝えるという仕事をしております。

よくこういう仕事をしていますと、「山崎さん、昔から地震や火山、水害など勉強して得意だったのですか？」と聞かれますがそんな事はないです。私がNHKに入ったのは昭和51年で、社会部の所属になりました。皆さんもご存じかと思いますが、新聞社も放送局もニュースを取材するところはいくつかの部局に分かれています。部局には、政治部・経済部・国際部・スポーツ部・科学文化部、それから、社会部があります。政治・経済・国際・スポーツ・科学文化の範疇に入らない森羅万象がすべて社会部の範疇になります。社会部は、俗に事件記者と呼ばれました。事件は、大事な社会部の取材ターゲットです。例えば、教育問題・司法の問題・ごみ問題・環境問題もすべて社会部のターゲットです。

私が社会部に所属した時、デスクに「山崎君、君は社会部に所属したが、これから何を取材したいのか」と聞かれ、全国のどこでもできるテーマである気象と災害に決めました。まず手始めに、気象庁の取材で気象庁へ行きました。私は文系の人間でしたので、最初は大変つらかったです。天気の新ニュースを書いたり、台風や雨量の取材をするには天気図くらいは読めなければ話にならないのです。火山や地震の取材をするには、地学のプレートテクトニクスが多少分かってないと気象庁や地震学者の方と話が通じないんです。そのうちに実際に災害が起こりますが、実際に災害が起こった時に動くのは役所はどこかということ、消防庁なんですね。



日本放送協会解説委員 山崎氏

気象庁は理科の範疇ですが、消防庁はどちらかというと社会の範疇です。災害というのは、理科と社会がくっついた時に災害になるんです。今日は風が強かったです、だけでは災害にはならない。その風でどこかの看板が落ち、人が怪我をした時に災害になるのです。その時は気象庁だけでなく消防庁も必要になる。私は取材していて、なるほどと思いました。理科ばかり勉強しなくても、社会が分かる程度に理科をやればいいんじゃないかと思うようになって、これは自分でもできるかもしれないと思ってから20年近くが経ちました。

去年は7月に新潟と福井で豪雨水害がありました。10月になって台風が上陸しました。兵庫の豊岡では、水害の後遺症の対策が続いている中で新潟県の中越地震が起きました。中越地震は阪神大震災以降、もっとも大きな地震災害になりました。これで終わりかと思いきや、年末にスマトラ島沖の巨大地震が起きました。これは万という単位の方がお亡くなりになりました。

今年になって、阪神淡路大震災から10年ということで、被災地の神戸で国連の防災会議が開かれ、その時も世界の巨大地震・津波による被害をどのように減らしていくかが大きなテーマになりました。

去年、取材したそれぞれの災害の中から、今後のために考えておかなければならないいくつかの事を断片的になりますがお話させていただこうと思います。

新潟・福井の豪雨は亡くなった方の大半が65歳以上の高齢者でした。新潟・福井・福島でも21の方が亡くなりました。このうち、17の方が65歳以上の高齢者でした。中にはおじいさんとおばあさんの2人暮らしで、寝たきりのおじいさんを何とか2階に持ち上げようとしているうちに水が浸水しておじいさんが亡くなってしまおうか、悲惨な犠牲者も含まれていました。

最近、こういう豪雨災害が多いですね。1時間に50mmとか80mmの雨が降るんです。50mmを超えたら車のワイパーを強くしても向こうが見えにくい。100mmになると、傘をさしていてもびしょぬれで隣の話も聞けません。その位の雨です。そんな雨が頻繁に降るんです。新潟・福井の時もそのような雨が続き、堤防が決壊して被害になりました。

高齢者の問題は、これからよほど考えなくてはならないと思っていた矢先、新潟県の中越地震が起きました。新潟県中越地震のひとつの側面をお話すると、高齢化が進んだ地域をおそった地震でした。

今、全国の高齢化率は平均19.5%です。ほぼ平均値だったのは長岡市だけです。十日町市は26%、小千谷市は25%、川口町は27%、2,000人のすべての住民が長岡市などに避難した山古志村に至っては40%になります。倍です、10人の人がいると4人は65歳以上の高齢者ということになります。

この2つの災害から、私達は何を読み取らなくてはならないかということ、それは日本がこれから高齢化社会に向かっていくと、こういう災害が増えてくるんじゃないかと考えなくてはいけないということです。そうすると、その高齢者の対策を一体どうするのかというのは災害にとって、それから日本の国にとって大変大きな課題だということになります。

阪神淡路大震災の時に、高齢化対策が大変大きな問題になりました。例えば、被害を受けた被害者はまず避難所に入ります。そこに入った後は仮設住宅で暮らします。そこに暮らしている間に自力で家を建て直せる人はいいんですが、そうでない人は公営住宅、これは復興住宅ともいわれる団地みたいなものですが、そこに住みますね。

阪神淡路大震災の時にどういう事が起こったかといいますと、例えば、被災した人がいたとして、その方は近くの体育館に避難します。神戸市は市の真ん中はなるべく早く復興したいということで、仮設住宅を郊外の空き地に作りました。そうすると体育館から仮設住宅に移動する時に、その地区に住んでいた人が遠くの郊外の仮設住宅に入らなくてはならない事になります。しかも、高齢者から順番に入居させましたから、あちらこちらの高齢者ばかりになる。一人暮らしの高齢者や高齢者世帯というのは、その地区に30年40年50年暮らしてきた人ばかりです。地域の人達とのつながりや、世間話をしたりするのが楽しみのひとつです。そういう人達がばらばらに仮設住宅に入りました。自力で家を建てられるのは若い方が多いですから、高齢者の方は今度はまた、公営住宅に入らなくてはならない。そして、その埋め立て地に建てた団地にまた高齢者をこっちからこっちという感じで移動させたんですね。せっかく仮設住宅で仲良くなってコミュニティができていたのに、それを全部断ち切って入居者を連れてきたのです。高齢の皆さんが何十年も住んでいた地区のコミュニティや人のつなが

りを断ち切られて、仮設住宅でようやくできたつながりをまた断ち切られて、新しい団地へ来て、しかも今度は長屋ではなく、コンクリート造りの5階建て・7階建てで白い壁・白い天井・鉄の扉です。高齢者の方で足腰が弱って階段などで行き来ができないため、もう1度近くの人とつながりを作り、団地の中で引きこもってしまう方が多くできました。この象徴的な出来事が孤独死といわれたものです。阪神淡路大震災で、その問題が未だにクリアされていない地域は非常に多いです。

高齢者の問題は、阪神淡路大震災の時も大きな教訓でした。今回新潟県中越地震の後、山古志村はどんな取り組みをしたのか？山古志村は仮設住宅や避難所に入る時、山古志村の14の地区の人達が必ずまとまって同じ地区の仮設住宅に入れるように取り組みました。

それから、阪神淡路大震災や三宅島の避難の時には家のサイズを優先しました。例えば三宅島にも二世帯・三世帯で暮らしていた人達があります。団地は2DKくらいですから3世帯で一緒に暮らすことは無理です。ですから、立川の団地におじいさんとおばあさん、多摩の団地に息子夫婦というような避難になった。これはいけないということで、山古志村では今まで作ったことのないような大きな仮設住宅を作って家族の単位を壊さないようにしました。しかも、集会所や村の診療所を仮設住宅の中に作りました。村の床屋をやっていた人は自分の仮設住宅の間を使って床屋を始めたり、まるで仮設住宅を元の村のような所にしたんです。これは、阪神淡路大震災の教訓が活かされたのです。

山古志村の高齢化率は40%といいましたが、これは昔からの数字です。その山古志村の人達は、高齢者を地区の人がまとまって暮らし、家族が見守り、村全体で見守ることによって対応してきたんです。つまり、高齢者の問題というのは災害があった時に動き出したのではだめだという事です。普段、どういう風に地域が高齢者の問題を考えているかがいざという時に生きるということなんです。

そういう取り組みをやっているところがあるのかを調べてみました。岩手県川崎村、ここも高齢化が非常に高いところで何度も水害にあってきました。この川崎村は、一人の高齢者を家族や近所だけに任せるのではなく、みんなで見守ろうとなっています。例えば郵便配達の人がその家の近くに行つて声をかけてみる。おかしいなと思ったら、民生委員に連絡する。民生委員が行つて、これはケアが必要と感じると隣近所の人をお願いする。行政にも連絡して、一人の高齢者をみんなで見守る仕組みを作っているんですね。これはすばらしい取り組みと伝えたところ、それは田舎だからできるんだろうと言った方がいらっしやいました。では、都会はどうなんだと調べてみました。

東京都江戸川区に渚団地という所があります。これは典型的な団地でここは高齢者の問題、地域の問題は地域で考えなくてはいけないと、団地の役員会が中心に団地に暮らしている人全員の防災名簿を作りました。どの人が一人では逃げられない、どういう生活をしている、どういう病気でいつどこ病院に通っているということが分かるようにしました。本人の了解を得て、いざというときに一人では避難できないという人の玄関には要救助者シールを貼り付けました。この家の人は救助が必要な方です、と誰でも分かるようにする為、作ったものです。それで年に一回防災訓練を行う時には、その救助されなくてはいけない人をどうやって誰が救助するかという担当者まで決めて訓練を行っています。これは防災と福祉、防災と防犯の連携だと私は思っています。高齢者の問題は普段からあって、災害の時にそれが大きく見えるのです。顕在化します。災害の時だけ対応しようとしても無理なんです。普段からやってるかどうかの方が大事なのです。

阪神淡路大震災以降、皆さんの町でもそうですけれども、それぞれの自治体や県は地域防災をつくる事が決まっています。防災や災害が起こった時、各自治体や県で自分達の地域はこういう取り組みをします、という計画をたてる事が法律で決まっています。そこには必ず災害弱者対策が必ず書いてあります。書いていない自治体はない。しかし、例えば一人暮らしの高齢者だけのお年寄りがどこに住んでいて、どんな悩みを抱えているかを知らない行政にはいざという時の高齢者対策はできないんです。

地域の問題はなかなか深刻です。去年は消防団にも多く取材させていただきましたが、昭和30年代くらいは全国に200万人位はいた団員が今、全国に93万人程です。半分以下です。だから地域の防災力が落ちているとすぐに結びつけては言えません。それを補って余りある婦人防火クラブや地域の自主防災組織の活動等もありますので。

ただやはり、私達が考えなくてはならないと思うのは去年の防災白書を見ると、全国火災原因のトップは放火と放火の疑いなのです。これは7年か9年連続でそうなっています。昔、大阪市の消防局が放火して捕まった犯人にどういう所が放火しやすいのかという調査をしたことがあります。一ヶ月

前の地域の催しのチラシがまだ貼ってある、ゴミを出す日が決まっているのに指定されていない日にもゴミが出されている、暗がりが多くて人通りが少ない、そんな地域は放火しやすいそうです。つまり、近所付き合いや取り組みがきちんとしていない所は放火しやすいという事ですね。最近、路上犯罪も増えてきています。ひったくりなどの路上犯罪も、昔から火の用心などをまわっている地域では少ないです。そんな取り組みが行われていないところはやはり多かったです。地域の問題を地域でどう取り組むかということは、こと防災だけに限らず大変大きな問題だといえるのではなからうかと思っています。

地域の取り組みはどのくらい災害の時に効果があるのかというと、これは阪神淡路大震災の時に瓦礫の中から救出された人がだいたい3万5,000人ほどいました。その人達は誰によって救出されたかという警察・消防・自衛隊で8,000人、家族と近所の人で救出した2万7,000人、これを見ると明らかです。大きな災害が起こると警察・消防・自衛隊では手に負えないんですね。例えば人口10万人ほどの町で同時多発で7~8件ほどの火災でしたら、地元の消防がなんとかしてくれると思います。ただ、阪神淡路大震災の時は同時多発で数十件の火災が発生しました。消防ではどうにもならないです。火災を10件しか消せない町で30件の火災が発生しても消防車は行くことができません。阪神淡路大震災の例を取材すると、近所で消そうとバケツを持ってきて近所のお風呂屋さんから水を持ってきて消して延焼を食い止めた、みんなが近くの避難所に集まった時にあそこのおばあさんがいない、もしかして埋まっているんじゃないか？助けにいこう、となった地域はやはり救助された人が多かった。それがこの結果です。

つまり、阪神淡路大震災が教えた最大の教訓は、災害は大きくなればなるほど防災機関の手には負えなくなるんです。何かあったら消防に助けをもらえばいいというのは、小さい災害にしか通用しません。阪神淡路大震災のような災害が起こったら消防は行けないです。

新潟県中越地震の時、90時間以上経ってから男の子が救出されたというのがありました。これはあれが1ヶ所だったからできたわけです。阪神淡路大震災のように120ヶ所もあれば行けません。そういうことなんですね。それは、やはり私達が一生懸命考えなくてはいけないことのひとつではないかと思っています。

最近の災害を取材して思うのは、災害には地域性があるということです。平成12年の3月に有珠山が噴火し、6月に三宅島が噴火し、9月に名古屋が水浸しになり、10月に鳥取県中部地震が occurred しました。

有珠山の噴火は大変驚かされました。有珠山噴火の前までは、だいたい噴火後に警報が出ていました。ところが有珠山の場合、初めて噴火の前に数日中に有珠山は噴火すると見られるという発表をしたんです。有珠山の周りの1万人近い人達は、噴火の前に全員避難しました。噴火は、例えば国道でもおきましたし、食べ物の工場のすぐ脇でもおきました。ですから、全員が避難していなかったら人的な被害が出たかもしれません。幸い、有珠山の噴火は、直接の被害として人が一人も亡くなりませんでした。これは世界の火山防災のお手本といわれました。どうして、そういう事ができたのかという話ですが理由は二つです。一つは有珠山という山は明治以降、だいたい30年~50年の間隔で噴火を繰り返しておりまして、近代の科学の目でとらえた噴火の記録が積み重ねられていた。つまり、科学的なデータがあったんです。噴火の前にはこういう現象が起こる、こうなってくるとこういうステージになる、有珠山というのはこういう形で噴火する山だ、と分かっています。しかも、有珠山の麓に北海道大学の火山研究所があって、有珠山のホームドクターのような先生がずっと有珠山を研究してた。有珠山のことは俺に任せてくれというような人がいたんです。つまり、近代的な観測によって有珠山の事がよく分かっていたというのが一つ、もう一つは何かというと観測技術の勝利なんですね。GPSというものがあまして、皆さんの分かりやすい言葉で言えばカーナビです。カーナビついてる車があると思いますがカーナビゲーションというのは地球の周りにいくつも飛んでいる人工衛星から出ている電波を地上でとらえて自分の位置を決めるんですね。GPSで測りますと、地上のここからここまでの距離をミリ単位で測れるんです。だから、ここここが何ミリあって、こっちとこっちが何センチあるということがGPSでは測れる。火山というのは地震と違って、例えば噴火に至るまでにはどういう事が起こるかという、だいたいマグマがあがってくるんです。何も無いところから、下からマグマがどんどんあがってきます。何も無いところへどんどんあがっていきますからどういう事が起こるかといいますと地面を割るんですね。下からマグマがあがってきて地面を割る、これが火

山の周りでおこる地震です。最近の観測技術はとても進歩して、今、人体に感じないような地震の震源も測定することができるようになった。今は、絶対人が分からないような地震の震源がどこにあるかが分かるようになってきた。もっとマグマがあがってくると、この前ニュースで出てましたが、浅間山で東側が少し膨らむ分だけ西側が少し縮んだりするんです。山が要するにセンチ単位で膨らむんですね。それをGPSがとらえるんです。二点間の距離をミリ単位でとらえます。その身体に感じない地震の震源も測定していくと、どうも震源が浅くなってきているということが分かる。過去のデータをつきあわせてみると、そういうことが起こると二日くらいで噴火してると分り、数日以内に噴火するおそれがあると出たんです。では、他の山でもやればいじやないかと思えますよね。出来ないんです、どうして出来ないか、富士山はもう300年噴火していないんです。富士山が噴火する前にどういう事が起こったかを分かる人はもう誰もいないんです。古文書を読むしかない。古文書にそんな細かいことは書いていない。だから、富士山で長周期の地震がおきたとか、湯気がでたとかニュースになりますが、それが噴火とどういう関係があるのかと分かる人は日本中、いや世界中でも誰もいない。だから有珠山で速報が出来たけれども富士山では出来るのか、まず出来ないでしょう。だから、これは有珠山だけの出来事なんです。

6月に三宅島が活動を始めました。三宅島は2000年9月2日か4日にかけて、3800人の住民が東京などに避難しました。今年の2月から4年半振りに帰島が始まっています。三宅島の噴火にもいくつかの特徴があるんですけど、ここではひとつだけ避難の特徴をお話します。三宅島の避難の特徴は何かというと、普通はさっきお話ししたように被災者がでると、まず最初に避難は体育館みたいな所で行われるんですね。私も体育館へ取材に行きました。有珠山でも行ったし、鳥取県西部も新潟県でも行きました。一日二日はいいですよ、みんな仲良くして暮らしていますから。新潟県中越地震なんか、体育館のスペースはひとりほぼ一畳ですよ。そこに一週間、二週間、一ヶ月と暮らすわけですね。若い女の子はその環境の中で着替えもしなくちゃならない。隣からは2・3日は我慢してるけれども3日目くらいになるとお酒を飲む人もいて、酔っぱらいもでる、いびきもかく。やっぱりプライバシーの問題は大きいんです。しばらくしていくと、ダンボールで衝立をたてて、家族単位で困ったりしています。三宅島の噴火の際に東京都は火山の噴火は長引くと、まあ4年にもなるとは思わなかったでしょうけれども、地震や水害に比べて長引くという事で最初から体育館には寝かさないようにしようという事で都営住宅に避難させたんです。

それはプライバシーの面から良かったんですね。ところが、先程阪神淡路大震災の所でもお話ししたように、三宅島の人達はひとつの島の中で非常に強い人間関係を形成しながら生活していました。運命共同体ですよ、同じ島にみんな住んでるんですから。そういうつながりの中で生きてきた人達がばらばらの団地に避難することになったんですね。

若い人達はいいですが、お年寄りの中には団地の中で孤立してしまう人が出ました。三宅島の対策を考えるためには地続きの所で暮らしている人達に比べて、地域のつながりが強くて運命共同体のようにして地域のコミュニティを作りあげてきた。そういう所でずっと暮らしてきた人達なんだということを配慮しなければ血の通った防災対策にはならないのです。つまり、三宅島にも三宅島固有の問題があるんですね。

鳥取県西部地震はどういう地震だったかという、過疎化が進んだ高齢化が進んだ地域がやられたんです。死者は一人もいませんでした。地盤が強かったのと、昼間だったのと、それから東京のように家が密集していなかった、というようなことが幸いしたと見られています。ただ、壊れた家はたくさんありました。

日本の災害対策は道路や橋や病院、公共の建物が壊れたときはものすごく手厚いです。優先で直されます。ところが、個人の財産形成に関わるものには税金はつぎ込まれません。ですから、家が壊れても自分の責任でなんとかしなくてはならないんです。

高齢者には建て替える余裕がありませんから、土地などを手放してしまう人が多くでたんですね。つまり、公共の施設が直っても住む人がいなくなってしまうんです。

そこで、鳥取県では全国で初めて個人の住宅の再建に300万円を出すという決断をします。それにそれぞれの市町村が100万円上乗せします、ということになりました。それによって、高齢者がその土地に残りやすいようにしたんですね。残った方に話を伺うと、ここで先祖の位牌を守りながら死んでいきたいとおっしゃっている方がたくさんいらっしゃいました。

これは何を意味するかというと、災害は地域の課題がたくさんあって地域の課題にきめ細かく対応していくことが重要なのだということなんですね。全国一律の法律を作ることもちろん大切ですが国や県や市に任せるだけでなく、地域や個人でも取り組んでいく必要があります。そのことについて、これからお話しします。

新潟県中越地震の時に、消防が搬送した負傷者は216人いました。その怪我をした人達は何故怪我をしたかということ、家具の転倒や落下で怪我をしたのが41%、人の転倒が25%、火傷などが11%、ガラスなどが8%、家屋の倒壊7%、そのほか8%という数字になりました。私がかつて取材した釧路沖地震の時に、明け方の地震で慌てて布団から飛び出した時に裸足で駆け回ったため、ガラスで足の裏を怪我した人が沢山いました。その時に、家族全員がガラスで怪我をしているなか、一人だけ怪我をしていないおばあさんがいました。これは、昔から枕元に懐中電灯を用意していたので、地震の時もガラスが飛び散っているのが見えたのでスリッパを履いて移動できた為だそうです。それで怪我をしない。家族に比べればそのおばあさんがしたことは防災対策ですよ。そんな難しいことではないんだなというのがよく分かりました。

阪神淡路大震災で取材して、とても大変だったのはトイレです。家が崩壊している人は体育館に避難しますが、それは1畳に1人程のスペースです。体育館はトイレは2つか3つしかないのにです。しかも、断水していますから、女性やお年寄りにはトイレに行きたくなくなるのが嫌だからあまり飲み食いしないようにしている人が沢山いました。

被害があまりでない家に取材に行ったとき、断水なのにそこはトイレの水がバケツにあるんですね。どうしたのかと聞くと、おばあさんが風呂の残り湯を必ずとっておいていたという事です。風呂の水があれば家族4人の生活用水は3日分くらいはもちます。

この話やさっきのおばあさんの懐中電灯の話からも分かるように、そんなに難しいことではないのです。つまり、防災対策とは新しい事を考えることはなくて、これやった方がいいんじゃないかなと思うことを何でもいいからひとつでもやっておくと、それはその分で助けになるということです。

正しい知識をもって、災害に備えるということはとても大切なことです。稲むらの火という話があります。

戦時中の小学校の教科書に載っていた話です。昔、大きな地震がありました。地震があると津波がくる。そこで、地元の名士のおじいさんが村人に知らせるために、稲むらに火をつけた。当時の稲むらは命の次に大切なものです。それに火がついているということでみんなあわてて消しに山を登っていった。それに津波がきて、みんな助かったという言い伝えです。今年の1月の国連防災世界会議でもこの話が注目されました。

それはスマトラ沖地震で何故こんな大きな被害が出たかということ、ここはもともと地震が少ない地域である為、地震と津波が結びつかないわけですね。日本は海で大きな地震があると津波が起こるかもしれないと警戒します。生きていくためには正しい知識を身につけなければならないということですね。

例えば、先程災害には地域性があるとお話ししましたが、崖の下に住んでいる人は大雨が降ったら崖くずれが起こるかもしれないと考えなければならない、川沿いに住んでいる人は洪水になるかもしれないと思わなければならない。それは、子供の時からみんなに教えておかなければならないということです。海辺の人には大きな地震があれば津波になるかもしれないという事をおしえておかなければいけないのです。

今回のスマトラ沖の地震で津波の映像を見た方はたくさんいらっしゃったと思います。津波と高潮や高波は全く違うものです。高潮や高波はせいぜい海の水の表面30cm~1mくらいの水が浮いたり沈んだりしているんです。津波は海底が動くことによって起こります。海の底から海の上までの海の水全部が動くんですね。津波はきたときは40分くらいきっぱなしです。海底から海面まで全部動きますから。ですから、ちょっと頑張って引くのを待って逃げれば良いという訳にはいかないんです。そういうことを私達は子供達にも伝えていかなければいけないというのを教えたのが、今回のスマトラ沖の大津波とそれによって世界が関心を示した稲むらの火ですね。

もうひとつ付け加えると、スマトラ沖地震の津波で何故被害が多くてたかといえばインド洋の沿岸には津波警報を出している国は少ないんですね。日本は地震が起こってから3分以内に気象庁は情報を出してテレビが一斉に伝えます。地震が起こると、テレビにそれぞれの自治体の名前が出ます。その

他に地域の防災行政無線で避難勧告がでたり、自主防災会や婦人防火クラブのルートを使ったり、広報車や消防団をまわしたりして日本は防災情報を流します。こんなきめ細かい防災情報をだしている国は世界にないです。

だから、日本の取り組みは世界に誇っていいと思います。日本がこれだけ災害の多い国でありながら、その災害に立ち向かって、これだけの経済成長を遂げているということをもっと世界に伝えていっていいんだと思います。

最後に去年の災害が何を教えたかということ、日本には100年から150年おきくらいに大きな地震が起こってきました。内陸を見ると、活断層が分かっているだけで国内に2千はあります。鳥取県西部地震はこれまで知られていない断層で起こりました。

つまり、日本に住んでいる以上は地震はどこで起こるか分からないということです。しかも予知ができない。地震の予知にはいつ・どこで・どのくらいの大きさの地震が起こると分かなければ予知にならないのです。

一番難しいのはいつ起こるかということです。どこで起こるとするのは最近の研究では分かるようになってきました。東海地震は地震計などをおいて、研究を進めています。しかし、他の地震はすべていきなり起こります。それが去年改めて分かったことですね。

2つめの台風をなめてはいけませんが、台風のニュースでものすごい風と雨の中で町を歩けなくなって柱にしがみついている人の映像を見たことあるかと思います。あれはどういう事かと思います。台風なので数時間すれば通り過ぎます。それをあえて、そこまでして出かけなければならない用事とはなんなのでしょう。台風の中を出歩くのは、看板等がぶつかる可能性もあって大変危険です。波が高い・川の水位が高いとあって、見に行くことも大変危険なのでやめていただきたいと思います。

普段やれていないことはいざという時はなかなかできません。これは分かっているようで分かっていない。つまり、普段の取り組みがいざという時に生きるというのが3つめです。

4つめの自然災害はなくせてないが、被害は減らせるですが、日本に住んでいる以上、世界の地震エネルギーの10%は日本と日本の周辺で起こります。そして、世界の活火山の10%は日本にあります。梅雨があります、台風がきます。こんな国は少ないですね。

でも、例えばイランでマグニチュード6.4の地震が起こると480人の人があつという間に亡くなります。日本でマグニチュード6.4の地震が起こっても、住宅を耐震構造にして家具を固定すればそこの地震被害にはなりません。日本の住宅は昭和56年以降、基準が厳しくなっていますから、阪神大震災でも昭和56年以降に作られた住宅はつぶれなかったんです。56年以前に作られた住宅の構造をしつかりさせて、家具を固定すればそうとう被害は防げます。

台風もそうです。サイクロンというのがインド洋にあります。太平洋では台風ですね。サイクロンがインドからバングラディッシュを襲うと5万人くらいが死ぬことがあるんですよ。日本も昭和20年代の伊勢湾台風で5万人くらいも死んでいます。台風の規模が小さくなったわけではありません。何故被害が減ったのかということ、伊勢湾台風の際は防波堤もなかなかなかった、雨が降った時に避難する仕組みもなかった、放送局も台風情報を24時間放送しなかった。そういう取り組みをすることによって、被害は減らすことができるんですね。

さっきでいえば、スリッパを履いて動くことでけが人を減らすことができる。しかも、けが人を減らすだけではなく、助ける側にもまわることができるのです。ただ、減るのではなく、プラスマイナスで考えるととても大きいのです。先程、近所の人が助けたのが7割という話をしました。怪我をしようとして7割に入れないですが、怪我をしない人が多ければそっちにまわれるんです。そういう風に考えながら、防災対策は進めていく必要があるのではなからうかと思っています。

せっかく今日はこれだけのたくさんの人にきていただいているのでお話ししますが、NHKにとって災害報道というのは人の命に関わる報道ですから、後ろ向きではすまされないと報道関係の者は皆そう思っています。

もし、何かあった時にはNHKがきちんと放送しているかを確認する意味でもNHKをつけていただきたいと思っています。そのお願いをして、私のお話にかえさせていただきます。今日はどうもありがとうございました。

## 災害が多かった'04年

- 新潟・福井で豪雨災害（7月）
- 史上最多の10個の台風上陸（10月まで）
- 新潟県中越地震（10月）
- スマトラ島沖の巨大地震と大津波（12月）

## 高齢化対策は大きな課題

### □ 新潟・福井の豪雨

21人の犠牲者のうち17人が65歳以上

### □ 新潟県中越地震の被災地の高齢化率

長岡市 20%

十日町市 26%

小千谷市 25%

川口町 27%

山古志村 40%

全国平均 19.5%

## 山古志村の高齢者対策

- (1) 同じ地区の人がまとまって生活
- (2) 家族単位を崩さない
- (3) 仮設住宅を元の村のようにする



阪神淡路大震災の教訓

高齢者対策は普段の取り組みが大事

## 各地の取り組み

### □ 岩手県川崎村

一人の高齢者を複数で見守る



郵便配達・民生委員・隣近所・行政

### □ 東京江戸川区渚団地

団地の防災名簿・要救助者シール



救助担当者を決めた訓練

## 防災と福祉・防犯の連携

## 地域の防災力



- 瓦礫の中から救出された人 3万5000人
  - 消防・警察・自衛隊 8000人
  - 家族・近所が救出 2万7000人
- (京都大学 河田恵昭教授)



災害が大きくなると防災機関の手に負えない

### 被害を減らす取り組み

- 消防が搬送した負傷者 216人の調査
  - 家具転倒・落下 41%
  - 人の転倒 25%
  - 火傷など 11%
  - ガラスなど 8%
  - 家屋の倒壊 7%
  - その他 8%
- (東京消防庁)

救助される人を救助の側に

### 稲むらの火

- 戦時中の小学校の教科書に載っていた話
  - 大津波がくることを稲むらに火をつけて村人に知らせた
- ↓
- 「国連防災世界会議」で世界が注目

正しい知識は的確な防災行動につながる

### 去年の災害が教えたこと

- 地震はどこでも起きる
- 台風をなめてはいけない
- 普段の取り組みがいざという時に生きる
- 自然災害はなくせないが、被害は減らせる

[最近の消防情勢についての詳細はこちら](#) (PDF1.8MB)

▲ [このページの上に戻る](#)

### 目次

- [1. 少年少女消防クラブフレンドシップ2005の開催](#)
- [2. 全国婦人防火連合会（総会）（その2）](#)
- [3. 平成16年度自主防災組織リーダー研修会（広島県）](#)
- [4. 婦人防火クラブ会長活動報告](#)
- [5. 平成16年度 民間防災組織の状況](#)